

人と人をつなぐ月刊総合誌

やすらぎ

平成19年・4月号・250円



- 神秘主義
- 神秘と詩の思想家
メヴラーナ：トルコ・イスラームの心と愛
- メヴラーナとセマー（旋回舞踏）
- 明日に向かって



メヴラーナ・ジャラルッディーン・ルーミー（イスラーム神秘主義詩人、法学者、神学者）は1207年、現在のアフガニスタン北部にあるバルフで生まれました。その後アナトリアのコンヤに移住したあと、人生の大半をそこで過ごし1273年に亡くなりました。メヴラーナをよく知らなくても、彼を開祖とするメヴレヴィー教団による「セマー」と呼ばれる、白いスカートを身につけた信者たちがくるくると旋回しながら修行する様子は、トルコの観光要素の一つとしても有名であり、写真などで目にされた方が多いのではないかと思います。メヴラーナ自身は、クルアーンとスンナ（預言者ムハンマドの言行）を軸に神の愛や唯一性、人間の生き方を説き、優れた詩作の数々は原語のペルシャ語にとどまらず各国語に翻訳され、現在に至るまで読みつがれています。

ユネスコ（国連教育科学文化機関）は、その任務や目的とメヴラーナの思想が一致していることから、2007年を生誕800周年記念と位置づけ、世界各地で各種の記念行事が予定されています。メヴラーナが広めた真の愛、世界や人間性の本質に迫る言葉は、宗教や民族を超えて人々の良心を呼び覚まし、現代の我々をも救済する一つの道標となってくれることでしょう。



今月号 内容

- * 編集部より 2
- * 神秘主義 3
- * 心を知る
カスドゥとアズム（意図と決意）... 3
- * 祈りのある毎日へ 6
- * チョコレート ケーキ 6
- * 預言者ムハンマドを語る
移住（想像を絶するほどのアッラーへの服従） 7
- * 神秘と詩の思想家 メヴラーナ トルコ・イスラームの心と愛 10
- * リサーレイヌールより
「年老いた人々へのメッセージ」 13
- * どれくらい水を飲むべきか 18
- * 映画から考える
『アッカトーネ』 Accattone 20
- * メヴラーナとセマー（旋回舞踏） 22
- * 明日に向かって 25





神秘主義とは、その真実が人間の良心によって知られ、感じられるものです。従って、自分の生を認識できていない人がこれを把握することは困難であり、同様に、他者の偉大な伝記によって慰めを得ている人たちもまた、それを理解することはできないでしょう。

神秘主義は、そのもたらすものから鑑^{かんが}みて、人が自らの無力さ、弱さ、何者でもないことを把握し、その存在の本髄を形成する神の存在の光、その特質の顕現に完全に溶け込み、無となることの呼称の一つなのです。

神秘主義とは、人がその魂を純化し、その本髄と一体化し、全ての時空を超越した未知の次元に達することです。そしてそれによってのみ、人は預言者のミラージュ(昇天)によって開かれた扉をとおり、神の御前に至り、ある意味ミラージュが実現するのです。いうまでもなく、自身の段階や能力に応じたミラージュに。

哲学や英知は、人の思考を広げ、人が物事や出来事を認識することを助けます。神秘主義は、理解を超越した次元において、物事や出来事の創造主に人間が接触することを助けるのです。そしてその人をアツラーの親友という状態に至らせるのです。

神秘主義は、一部の教団の人々において見られるように、ズィクルや熟考という道をとおり、人の魂が神の完全性に支えられて光を得ることによって成り立っています。それは、人が自我を尺度として、無限への仮の足場を作るところから始まり、ついには自我や自我に秘められたものを放棄し、全てはアツラーから、と知ることによって完成されるのです。

神秘主義は、哲学が到達することのできない神の真実を、心の手、心の足、心の目で探ろうとする道です。知性がみじめな格好で追い返されてしまうこの道で、心は鳩のようにばたき、価値を理解する力のあるその目で、知られざる存在を知ろうと努めるのです。そしてそこで得た真実を、「あなたを正しく知ることができないのです」という言葉で訴えるのです。



カストゥとアズム(意図と決意)*

カストゥとは、自信、決意、選択、目的に向かって真っ直ぐ前進すること、節度を守り慎重に思索し推論すること、そして中庸で調和の取れた人生を送ることです。イスラーム神秘主義者にとってこの用語は、初学者が真に愛されるべき存在であるアッラーの愛とご満悦を求めること、そしてこの目標を達成しようと意図することを意味します。

心はアッラーの家である。何であれ、アッラー以外のものが入ってこないようにしなさい

そうすれば、夜、慈悲深きアッラーが彼の宮殿へと降りて来られるかもしれない

エルズルムのイブラヒーム・ハッキによって、彼の著書「マーリフェトナーメ(知識の書)」に収められたこの二行連句は、真の愛とアッラーのご満悦を獲得する意思を表現し、実現する方法について語っています。意図と決意の間に横たわる道、そして決意から目的地に至る道についてが簡潔に述べられています。心の平安を獲得し、極端に走ったり精神的な困難や苦痛に晒されることなく安心した状態でいられるための唯一の方法は、アッラーの愛とご満悦を求めること、そしてこの目的を取り囲むように人生を秩序付けることです。ルーミーは次のように述べています。

友に欠け、それを求めている心は 苦悩と苦痛から逃れることはできない

友の愛が存在しない頭には意味と価値を求めぬ 骨と皮でできているだけだから

心をアッラーに定め、アッラーに到達しようと決意した人は、アッラーに続く道に従ったり、その道を旅するための必要性を満たすことを決して軽視することはありません。彼らはたとえほんの一瞬アッラーから他のものに目をそらしただけでも、一生涯ため息をつき続けるでしょう。アッラーに通ずる道に気付かないまま生きている人はなんと不幸なのでしょうか。その道をいったん捉えたとしても、そこから転落したり立ち往生してしまうとはいかに大きな損失で取り返しのつかないことでしょうか。

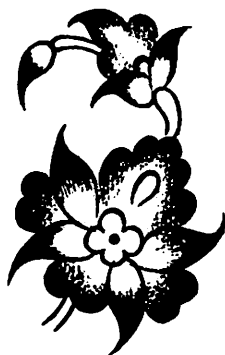
心の中で芽生え、発育していく決心は、その後さらに強固で確固たる感情に成長し、その人を、目的地

* この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” よりの訳です。

に導く非常に強力な原動力となっていきます。このような状況では、決心は意図を意味し、心の土壌に蒔かれる種子にも似ています。人はこの意図もしくは種子を心に持っていれば、全能のアッターからの援助を受けることができます。そして種子は発芽し、実りの多い木へと成長していきます。意図を持って旅に出て数歩進むと、人は決意を見出します。決意とは何かを成し遂げようと決断していること、断固として探求すること、しかるべき責任の全てを意識的に履行すること、と定義することができます。

意図と決意は意志の力に備わる二つの重要な特質もしくは機能です。長旅に出発しようとの意向を持つ旅人は誰も、より高い段階に進んでいくためには、アッターから与えられる許可もしくはビザを手に入れるためいったん意図と決意の段階で立ち止まらなければなりません。旅が真の始まりを告げるのはこの後なのです。意図と決意の翼を身につけた旅人は終着点に招かれているように感じ、もはや自力で進むのではなしに運ばれていくように感じるのです。あるアッターの友は言っています。「アッターに見えんとする願望で溢れる者は誰でも、終着点に至る道程で要求されるものを満たす能力に欠けていたとしても、アッター御自身がその者のところにやって来られる。それからアッターはその者がものを見る目となり、聞くための耳となり、話すための舌となられるのである。」

意図と決意の両翼に乗って舞い上がる旅人にとって、アッターに見えることは消滅の中に永遠の生を見出すことを意味します。アッターが会いたいとお望みになる人々にとっては、アッターに見えることは永遠の中の永遠の生を意味し、「好循環」の中でいかなる問題や苦しみに悩まされることもなく、幸福に次ぐ幸福を味わうこととなります。この循環においては苦しみは喜びへと変わり、悲嘆や苦悩は恩恵の証拠とうつります。この地点に到達した人は喜びを感じながら言うでしょう。「あなたからもたらされるものは、恩恵であれ罰であれ好いものです」と。





ドゥア (祈り)のある毎日へ

万有が従順になるお方よ

万物が従うお方よ

万物がそのなかに存在するお方よ

万有がこいねがうお方よ

万物が恐れるお方よ

万物が讃美するお方よ

万有がかれによって立ち保持されるお方よ

万物がひざまずくお方よ

万物がかれに戻るかのお方よ

万有は滅びかれの慈顔のみが永存するお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。

私達を地獄の炎からお助け下さい。^{*}



レシピーコーナー

チョコレートケーキ

材料 2タマゴ 100g 砂糖 250cc 牛乳 小匙 1 ベーキングパウダー バニラ

100g バター オレンジ か レモンの皮 1こ分

- * タマゴと砂糖を混ぜる
- * そこに牛乳 バターを入れ混ぜる
- * そこに残りの材料を全て入れ混ぜる。170度 40分焼く

^{*}ジャウシャン・カビール (偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り) には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、(ジャウシヤヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。ジャウシャン・カビールのアラビア語/日本語訳オーディオCD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>

[†] Bukhari, Maghazi 31, Bukhari, Jihad 84; Muslim, Fada'il al-Sahabah 13; Hakim, Mustadrak 3/29



移住（想像を絶するほどのアッラーへの服従）

ある時、預言者ムハンマドは木陰で休んでおられた。そこへ、ガウラスという名の不信心者が来て、預言者が寝ておられるのをいいことに、木にかけられていた剣を取り、喉元に突きつけた。そしてあざけるように「今、あなたを私から誰が救ってくれようか」と言った。これに対して、預言者ムハンマドは全く慌てる様子も見せられなかった。なぜならそのお方のアッラーに対する信頼は完全なものであったからだ。自信に溢れた声で「アッラーが救われるだろう」と怒鳴り返された。この声に、不信心者は覇気をなくし、剣を取り落とした。その剣を預言者はお取りになり、言われた。「それで、今度はあなたを誰が救うのだろうか？」男は激しく震え始めた。その時には、預言者の声を聞きつけた者たちがそこに集まって来ていた。そしてその様子に皆驚いていた。後に、そこであった一部始終を知って、彼らの預言者ムハンマドに対する信頼はさらに増したのであった。ガウラスも、そこで見た信頼に、預言者ムハンマドに対して信頼すると述べ、その場を離れた。†

欧米の著名な思想家バーナード・ショー（Bernard Shaw）は次のように述べている。「ムハンマドは、いろいろな点で、人の想像を超える優秀さを持つ人である。この秘密に満ちた人を完全に理解することは不可能だ。特に、彼の神に対する信頼は、理解することのできない大変なものである」

彼の言うことは正しい。預言者ムハンマドのアッラーに対する信頼と服従は、我々の物差しでは計ることのできないほどのものである。預言者ムハンマドの、アッラーの元における地位や価値も、御自身のアッラーに対する信頼と同様である。預言者ムハンマドが望めば、夜は昼になり、暴虐は光になり、物乞いにも皇帝ほどの富が与えられる。この関係について、ハサン・バスリによって語られているある出来事をここで取り上げて

みたい。預言者ムハンマドとの結びつきの重要性という点で、とても意味のある話だと思われる。バスラのある若者が、年老いた父親と共に、巡礼に行く決心をした。しかしマッカに向かう途中、父親が死んでしまう。その上、死体は変形し、実に奇怪な形相を示している。この状況は若者を非常に苦しめ、驚かせ、彼はどうしたらいいか途方にくれた。誰をテントに呼んで、この死体を見せ、助けを求めることができるだろうか？悩み続けている時、彼の上に何かが起こり、彼は睡眠と覚醒の間の状態に陥っていた。その時、テントの入り口が開き、輝かしい顔の人物が一人、中に入ってきた。この人物は、父親の枕元に座り、その手で父親の全身をなでた。すると見る間に、手が触れたところから死体は元の状態に戻り、きちんとした人間の形を取り戻したのであった。若者は驚きの余り何がなんだかわからなくなりそうであった。その人物がテントから出る時になって若者はそばへ駆け寄り「アッラーへの愛にかけて教えてください。あなたは誰のですか」と尋ねた。「私のことがわからなかったのですか？ 私はムハンマドですよ」という返事を得て、若者は喜びの余り宙を舞うところであった。「預言者よ、今の出来事は何だったのですか。なぜ父の形が変わってしまったのですか」と尋ねると「彼はいつも酒を飲んでいました。そのためです」と答えられた。「あなたがここに來られた理由は？」と若者はさらに尋ねた。「あなたの父親は、私の名を思い出すといつも、私に祈っていたからです」というのがその答えであった。

この男の、ほんのこの程度の預言者との結びつきでさえ、そのまま無視されることはなかったのである。預言者ムハンマドは、最も必要とされた時に、彼のために仲裁をされるのである。死の瞬間に、その魂の世界はアッラーの許しにより、準備が完了しているのだ。

預言者ムハンマドは、人間たちの中で最も信頼され、従われるお方であった。そのウンマ（共同体）も、それにふさわしい素質を持つべきである。

「誠にアッラーは、あなた方が信託されたものを、元の所有者に返還することを命じられる。またあなた方が人の間を裁く時は、公正に裁くことを命じられる。アッラーがあなた方に訓戒されることは、何と善美なことよ。誠にアッラーは、全てを隠き凡てのことに通曉なされる」（婦人章4/58）

この節がくだされた理由を聖アリーは次のように説明している。預言者ムハンマドは、カアバの鍵を、当時まだムスリムではなかったウスマーン・ビン・タルハから受け取られ、御自分でカアバを開けられた。聖アッバースが来て、その鍵を求めた。しかし、将来立派なムスリムになる可能性のあるタルハは、信託にさらに適切であり得た。同時に、鍵が彼に預けられることは、彼の心をも開くことになると思われた。そして事実そうだったのである。この章がくだされたので、カアバの鍵は再びウスマーン・ビン・タルハに預けられ、後にこの人物は偉大なムスリムになったのである。^{*}

ただし、この節は広く通用するものである。なぜなら、預言者ムハンマドは、信頼が失われることは、最後の日の印となる、とみなされ、次のようにおっしゃられている。「信頼が欠如するようになると、審判の日を待ちなさい。」教友が尋ねた「信頼はどのように失われるのでしょうか？」預言者ムハンマドは答えて言われた「適切でない者に、仕事を与えられた場合」[†]

信頼はとても重要である。仕事をふさわしい者に与えることも一つの信頼であり、これは世界の秩序を保つために最も重要な要素の一つでもある。信頼が失われると、公正なバランスや秩序も失われることになる。これに関わることで預言者ムハンマドのある言葉がある。「あなた方は皆羊飼いであり、皆自分の所有するものに対して責任

を持つ。国家の長は、羊飼いの所有する者に対して責任を持つ。個人は、それぞれ自分の元にあるものの責任者である。女性は、夫の家を守り、管理しているものに対して責任を持つ。召使いは、主人の財産を守り、管理しているものに責任を持つ。あなた方一人一人が羊飼いであり、その管理しているものに責任を持っているのである」[‡]

ここで言われているのは、次のようなことである。この世では皆がお互いに信託された者であり、全ての存在はアッラーへ託されたものである。聖クルアーンはまずジブラーイルへ、それから預言者ムハンマドへと託された。聖クルアーンの実質は、預言者ムハンマドの布教へと託された。そして、全てのウンマは、アッラーへ託されているのである。

生活、社会生活を成り立たせているさまざまな要素は、それぞれが一部ずつ重なり合った円のようなものである。そのうちの一つに現れた小さな不都合は、重なり合った他の円にも影響を及ぼしていく。このことに疑問をはさむ者はいないのではないだろうか。ささいな傷が、適切な処理をされないうちに治療不可能な瘻疽に到ることは、疑う余地もない事実である。だから、それぞれの円が、自分に託された仕事を正しく成し遂げる必要があり、予想される不都合を防ぐべきなのである。

このハディースでは、この結びつきと全体性が示されている。門番から、国家の長に到まで国家を形成する全ての個人が、自分に託されたものについて責任を持っていれば、人間ははるか遠くから羨望していたこの信頼を、彼自身の社会でも見出すことができるだろう。

預言者ムハンマドはまた次のように述べておられる。「誠実ではない人物には、信心もない」[§] 管理しているものへの責任を果たさない者は、その信心も完全ではない。つまり、誠実さと信心は、それぞれが原因と結果のような関係であり、託されたものへの責任を果たさない者は完全な信心の持ち主とは言えないと同様、完全な信心の持ち主でない者に真の誠実さを見出すことは難しい。

^{*} Ibn Hajar, Isabah 2/460; Ibn Hisham, Sirah 4/55

[†] Bukhari, 'Ilm 2; Ibn Hanbal, Musnad 2/361

[‡] Bukhari, Jumu'ah 11; Vasaya 9; Muslim, 'Imarah 20; Abu Dawud, 'Imarah 1

[§] Ibn Hanbal, Musnad 3/135

もし彼が完全な信心を持っていれば、彼は託されたものに対しても誠実であるはずである。誠実でなければ、その信心も完全ではない。

他のハディースでは、預言者は次のように述べておられる。「真の信者とは、人々が自分の財産や生命について彼を信頼している者のことである」^{*}

預言者の誠実性について述べたところで一度触れたあるハディースを、ここでもう一度見てみたい。預言者ムハンマドは言われた。

「あなた方は私に六つのことを約束しなさい。私もあなた方に天国を保証しましょう」

1. 「話す時は正しいことを話しなさい」言動において正しくありなさい。あなた方はそれぞれが矢のようでありなさい。

2. 「約束を守りなさい」そもそもこれと対称にあるのが偽信者の印である。これも前に触れたテーマである。

3. 「託されたものに誠実でありなさい」あなた方を信頼して誰かが何かを託したなら、それを裏切ってはいけない。彼らの考えが偽りであったということにしてはならない。

4. 「純潔でありなさい」自分自身の名誉を守りなさい。他人の名誉も、自分同様に考え、それを守りなさい。(このテーマについては、後に詳しく見ていきたい)

5. 「あなた方の目を禁じられているものに対して閉じておきなさい」あなた方のものではないものを見てはならない。あなた方のためにならないものに目を止めてはならない。ハラーム(宗教上禁じられているもの)であるものを見ることは、精神を壊す。ある神聖なハディースでは次のように述べられている。「ハラームであるものを見ることは、シャイターン(悪魔)の毒矢の一つである。(あなた方の意志の弓から飛ばされ、あなた方の心に突き刺さる)誰であれ、私への尊敬によ

りハラームを見ることをやめれば、彼の心に信仰を与えよう。彼はその喜びで心を満たすであろう」[†]

6. 「あなたの手が他のものに害を与えないようにしなさい。誰にも、いかなる形であれ悪いことをしてはならない」[‡] 見方によれば、信頼される人であるための条件と言えるこの言葉に従う者は、信頼のうちに生きる。あの世についても、安心と保障を得たことになる。そもそもこれに従うと預言者ムハンマドに約束した者に、ムハンマドも天国を約束されているのである。

この世界の安全も、信頼される人が約束を守るにかかっているのである。もし、全てのイスラーム世界が、信頼に答え、この世界の安全と信用を代表することができるようになれば、世界は新しい均衡を手に入れるであろう。現実には、この世界の状態は実に痛ましいものである。詩人アーキフはこの状態を次のように表現する。

恥の意識はなくなり、あつかましがどこでも見られる
何と醜い顔ばかりがその薄い覆いで覆われていることか
忠実さも尊敬も全くなく、信頼は無意味である
嘘や裏切りばかり、正義など知られてもいない
毛が逆立つ、神よ、何と恐ろしい革命が起こったのだろう
教えも、信仰も、教えのための戦いも、信仰の土地も、
何も残っていない



[†] Hindi, Kanz al-Ummal 5/328

[‡] Ibn Hanbal, Musnad 5/323

^{*} Tirmidhi, Iman 12; Ibn Maja, Fitan 2



神秘と詩の思想家 メヴラーナ トルコ・イスラームの心と愛

宗教学者東京トルコ・ディヤナト・ジャーミイ監訳

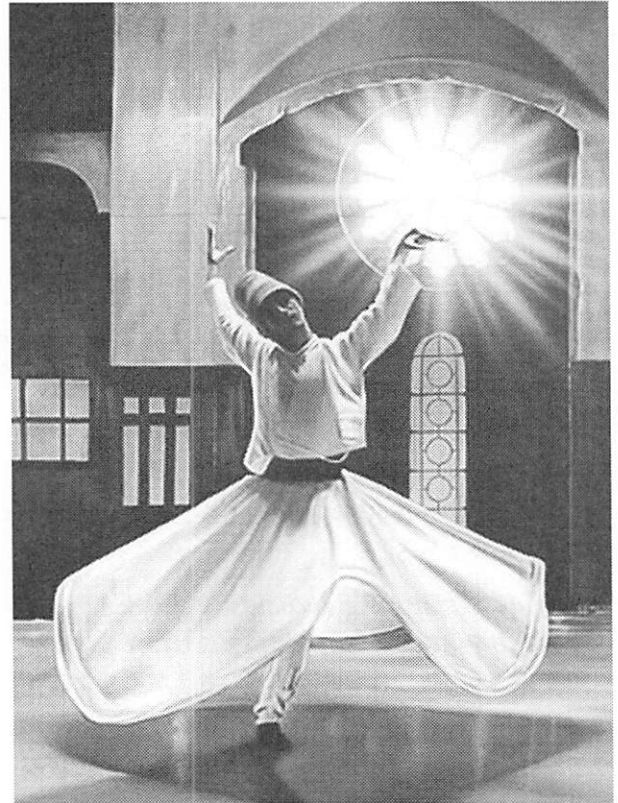
西田今日子 訳

第1章「メヴラーナの生涯」より

彼の遺志

メヴラーナは、死を迎える最後の瞬間まで、人びとに助言を与え続け、真理への道へと招き続けた。彼は彼の友人たちにあてて、次のような言葉を遺している。

友よ、あなた方に言い遺すことがある。
陰に陽に神を畏れよ。
控えめに食べ、
控えめに眠り、
控えめに喋り、
罪を避け、
断食と礼拝を怠らず、
欲を慎み、
苦痛と災難を耐え忍び、
礼節を^{わきま}弁え、平凡に甘んじず、
誠実な人々、賢明な人々と共にあれ。
最も良い人とは、人々の助けとなる人のこと。
最もよい言葉とは、短くとも誠実な言葉のこと。



第2章「メヴラーナという人物～彼にまつわる逸話から」より

寛容

メヴラーナという人物について語るのに、「寛容」ほど似つかわしい言葉はない。

彼は『メスネヴィー』の中で、他者の過ちや罪に対して寛容であるように、あるいは他者の罪を裁くことで自らが罪を犯すことのないように、あるときは比喩を用い、またあるときは寓話を用いて忠告する。彼は誰に対しても、罪によって裁かれることよりも、その人と共に罪が赦されることを祈った。

彼のこうした性格は、子供の頃からすでに身につけていたものである。彼は学問上の知的な議論の時でさえも、決して誰かに反論したりすることはなかった。彼は、自分の視点や意見を披露する前に、まず相手に受け入れられるかどうかを考えた。そして無理だと判断すれば、黙って相手の意見に耳を傾けた。自分の意見を押し通して、無用な争いの種を蒔くことを避けたのだった。

これについて、メヴラーナは人びとに次のように語っている。

「誰かが、あなたの友人の悪い振る舞いをあなたの耳に入れたなら、その友人の良い点を何度でも繰り返し伝えよ。何ごとも好意をもって解釈するよう努めよ。それでもあなたの目には悪としかみえないようであれば、『神のみがご存知である』と言って、そこから遠ざかれ。

何ごとも完璧を求めるな。欠点のない人などこの世に存在しない。友人に完璧を求めれば、あなたはたちまち孤独になるのだから。」

第4章「メヴラーナの思想」より

野心：野心は、それを持つ者の目を曇らせ、耳を塞ぎ、理性の働きを鈍らせる。その結果、野心を持つ者の心は外界から遮断され、無知へと転落する。

嫉妬：嫉妬は習慣のうち最も悪いものであり、すべての欠陥と過失の種である。

中傷：中傷、陰口の類いは、人の肉を喰うも同然の忌まわしい好意である。それを行う者の口が悪臭を放つことを、神はよくご存知である。

高慢：かつて天使であったものが、罰を受け、永遠に神の赦しを得ることなく悪魔となってさまよっている。すべて高慢さから起きたことである。

富への執着：富への執着とは、喉に詰まった糞である。現世の名誉や財産に眼のくらんだ人々の、喉に詰まっているこの糞は、永遠の至福の源となる生命の水が、喉元を過ぎ体内に浸透するのを邪魔している。

贈賄：贈賄がまかり通ると、正義は麻痺し秩序は乱れる。人々は混乱し、暴君と名君、圧制と善政の判別ができなくなる。

他人の欠点をあげつらう者：そもそも人間は、自分の短所の数々を気に病まずにはいられない。

一旦気づけば、何とかして直そうと躍起になり、他人のことなど構っている余裕はない。

それでも他人の欠点や短所をあれこれと詮索するのは、結局は自分の欠点を受け入れられず、他人に押しつけようとしている場合がほとんどである。

怒りを鎮める：怒りの感情が湧き起こっても、それを抑制することができる者は、神の怒りをも免れる者である。

忍耐：忍耐こそは救済の鍵である。忍耐は、あらゆる種類の困難を取り除く。

メヴラーナは死に関する一連の考察を次のような言葉で語る。

死は愛する御方との逢瀬

何の苦しいことがあろう

何の怖れることがあろう

私が死んでも「彼は死んだ」とは言わないでおくれ

私が死ぬ時、それは私にとって復活の日なのだから

私の大切な友が私を連れ去って行くだけなのだから

第7章「メヴラーナの言葉」より

苦痛と困難から逃れようと、そればかり考えている者よ、心せよ。

神は否応もなくあなたに苦難を送り届けよう。あなたの友人があなたの心を悩ませる時、それは疑いもなくあなたを浄化せんとする神の試みである。

神の知恵は、あなたの浅はかな知恵よりも数段勝ったところにある。(メスネヴィー4巻)

感謝は、伝わるように示しなさい。

自惚れて、ものごとを誤魔化してはいけない。

鼻でせせら笑ったり、侮蔑したりしてはならない。

注意深く耳を傾け、傲慢になってはならない。

哀れむべきかな、悲しむべきかな、

自己意識の過剰と自己愛がせめぎあう虚偽の世界を。

宗教を共にする者同士が営む社会でありながら、

宗教とは最もかけ離れた振る舞いに滴り滴りしているとは。(メスネヴィー1巻)

益になる言葉を話しなさい、無駄話は避けなさい。

そして話すならば、感謝を捧げるように努めなさい、不満を訴えるのではなく。

全ての者にとって必要なこと、それは神に感謝を捧げること。

議論して、相手にしかめつらをさせることを感謝とは呼ばない。

感謝の祈りを捧げる者が、酔のようであってはならない。

味わう者の顔を、ゆがめるようであってはならない。(メスネヴィー1巻)



年老いた人々へのメッセージ

14番目の希望

「4番目の光線」の始めに「ハスブナ=ツ=ラーフ ワ ニ ‘アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」（聖クルアーン イムラーン家章3/173）という輝かしい節について説明されているが、要約すると次の通りである。ある時、この世を好む人々が、私を全てのことから孤立させたので異郷の地で、五種の寂しさに私は苦しんだ。苦しみから来るこの異郷でのさびしさによって、「光の書簡集」が与える癒しと援助の光に目を留めることことなく、直に私の心を見つめてみた。そして、私の魂を探った。気付いたことは、力強い永遠への熱望と（自分の）存在への強い愛と生の熱い憧れと、限りない無力さと果てしのない貧しさが、一緒に私の中で入り乱れていることだった。実は、深い無常の念が永遠を消去ろうとしていた。その状況で胸を焦がすある詩人が語ったように、私もつぶやいた。

言葉は永遠を望む、真の主は私の肉体が無常であることを望んだ。

薬も効かぬ苦しみに陥った、嗚呼、クルアーンも治せぬ苦しみに。

私は絶望し、^{こぶ}頭をたれた。と、突然、「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」（3/173）が、私の救助に駆けつけた。「私を注意深く唱えよ」と語りかけた。私は日に500回唱えた。唱えるたびにただ知識によってだけでなく、目撃したかのように確信を持って、価値ある無数の光の中から「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」の節について、9の段階(メルテベ)が私の前に開かれた。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第一段階

私の中で永遠に対する熱望は、私自身の永遠ではない。確かに、何の理由もなくご自身が愛される価値のあるお方、真に完璧な、完全な偉大なお方、そして、いと高く偉大なお方の御名を^{おぼ}顕わす影を、私という存在の中に見出だせるのだが、本来私に備わっているはずの真に完璧な存在、完全、永遠を求めようとする生来の熱愛（の情）が、不注意さによって乱れ、その影にはりついてしまい、鏡に映る永遠を私は愛するようになっていた。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」が^{おぼ}齎され、その覆いを取り除いた。

私は見てそして感じ、真の確信を得、喜んだ。私の永遠の喜びと幸福と同時に、申し分のない形で完璧な偉大な永遠なるものへの確信と私の主と神への承認が、私の信仰と私の知性の中に存在していた。五感によい驚きを齎す深くこまやかな信仰の意識と共に、第4の光線という便りの中でこれらの証明つま

り、「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」の節の秘密が明らかにされている。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第2段階

生来備わった無限の無力さと共に、老いと故郷から離れた寂しさと孤独と隔離の中で、この世が数々の策略とスパイ達によって私に攻撃しかけたとき、私は心にこう語りかけた。「私にとって信頼にたる拠り所となるものはないのでしょうか。」と。そして「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」の節に頼み、助けを求めた。その節は私に次のように語りかけた。「信仰の実証によって、全能な支配者と結ばれる。彼は地表において毎春4万の国々で植物と動物の群について、完璧な秩序に従い、それらの装いの準備を万全に整え給う。それは、文明社会に住む人々が最近見出した肉、砂糖、その他の食べ物のような要素ではない。その文明生活的なものより100倍も完成されており、食べ物全ての種類の数だけ、穀物の粒や果実の種(核)といった慈悲深きお方にふさわしい要素(遺伝子)を準備し給う。さらに、それらの要素の中に実のなり方や生長の仕方についての「神のご決定の記」が含まれ、守るために小さな箱に入れ、預けたまう。その小さな箱を開くのは「クン(あれ)」という命令を含む「カーフヌーン^{*}工場」であり、そこから大変すばやく、容易に多くの者が一斉に作られる。クルアーンはこのように述べられる。「創造者が命令し、それらは出現する。」と。そもそもあなたが信仰(イーマーン)という方位磁針と結びつくことによって、このような信頼の拠り所を見出せたのであるから、無限の御力と権能にお頼りなさればよろしい。

私も、この節からこのように学び、強い精神力を得た。現在の敵達だけではなく、全世界に兆戦できるほどの信仰の強い力を感じながら、全霊で「ハズブナ=ッ=ラーフ ワ ニ ‘アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」と私は唱えた。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第3段階

私は異郷での寂しさと病氣と抑圧により、この世との関係を断ち、あの世の世界、永遠の国で、常しえの幸せを望むことを信仰が私に思い起こさせたとき、恋しさのあまり発する「嗚呼」を止め、微笑みながら「おお」と発した。しかし、この想像上、精神上の目的は、人間の本性に基づいた結果を実現することは、ただただすべての想像物の活動と静止(休息)と状態と行為を、言葉においても行動においても知り記録し給い、そして、大変小さな全く無力な人間という種族を、ご自身の友、対談者となし給い、すべての創造物の長としての地位を与え給うた、完璧な力の持ち主の限りなき力によって、そして人間に無限の恩寵ぬちちゆうと重要性を与えることによって、可能であると私は考えた。その一方で、この二点、つまりこのような力の動きと見かけは重要には見えない人間の真の重要性について、信仰の広がりとの安定を与えるような説明も望んでいた。

* アラビア語で、クンはカーフとヌーンの二文字からなる。

再びその節に頼み救いを求めた。それは、「ハスブナー^{*}のナーに注意し、舌の動きとその言葉の意味に注意すると同時に、あなたと一緒に、誰がハスブナーといっているかよく注意し、聴きなさい、」と命じた。突然、私は気がついた。数多くの鳥達、鳥の縮小版の蠅達、数え切れないほどの動物達、無数の植物や木々は皆、私のように、それぞれの言葉で、「ハスブナ=ツ=ラーフ ワ ニ ‘アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」の意味を繰り返し繰り返し唱えているのであった。さよう、全てのものが繰り返し繰り返し唱えていた。生きる条件を全て代わりに受け入れる代理人たちが存在しているのだ。それぞれが似ており、(構成)物質は同一の卵、雨粒、同様の種子、同等の果実の種によって、10万もの種類の鳥達が、10万もの違った形をした動物達が、10万もの種類の植物が、10万もの群の木々が、間違いなく、完全に、お互いが似ているにもかかわらず混同されず、美しく飾られ、正しく配列され、それぞれがしっかりと区別され、私達の目の前に、とくに春に、十分に、大変容易に、非常に広大な規模で、一斉に多くのものが創造される。その偉大な巨大な力で、それぞれが、一斉に、似た形に、共存して、造られることによって、彼は私達に彼の統一性と唯一性を示し給う。このような素晴らしい奇跡を示す(仕えられる)主の御業と創造主としての所有には何一つ介入も参与もないことを知らせていると私は理解した。全てに信仰者達のそれと同様に、私の個性、人格を理解したい者、私のようにになりたい者は、ハスブナーのナーの中に存在する我(アナ)[†]、つまり私の自我についての説明に注意を向けてほしい。

重要でない取るに足らない哀れに見える私の体は全ての信仰者の体と同様に何なのか、人生とは何か、人間性とは何か、イスラームとは何か、確かな信仰とは何か、アッラーを知るとはなにか、そして愛とはどのようにあるべきかを理解しなされるように、そして学びなされるように。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第4段階

古い、異郷の地での寂しさ、病気、挫折というような、私の存在を揺り動かすいくつかの支障が、ある時、私がちょうど迂闊^{うかつ}だったところとぶつかった。私は強く関心を持ち私の体に没頭していたが、恐らく体の全てが無になるだろうと悲痛な不安を抱えていたとき、再びこの「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」に頼み、救いを求めた。それは、語った「私の意味に注意せよ。そして信仰という望遠鏡を使って眺めてみよ。」と。

私はよく見た。そして信仰の目によって眺めてみると、私の粒のような小さな体は、全ての信仰者の体と同じように、限りない存在を映し出す鏡であり、無限の広がりを通して、数多くの存在を得るきっかけとなり、自分自身よりももっと価値のある永遠に続く様々な存在の果実を生産する英知ある言葉であり、この結びつきによって、一瞬を生きることは永遠の存在と同等の価値があるのだということを、確かな知識によって私は知った。

* 「ハスブナ=ツ=ラーフ ワ ニ ‘アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」のハスブナーです。

† アラビア語で、ナーはヌーンとアリフの文字からなる。アナの中にアリフの文字が含まれる

なぜなら、信仰を意識することによって、この私の存在が、必要不可欠な存在の作品、加工品、そして顕現であることを理解したので、激しい不安と数多くの別れと別離の寂しさから救われ、存在、特に生き物に関わる神の御業と御名の数だけ兄弟達と結びつき、それと共に、関係を明白にした私の愛する全ての存在、それらとの一時的な別れの中に、常しえの再会のチャンスがあることを知った。さよう、信仰によって、信仰と結びつくことによって、全ての信仰者のように、この私の存在もまた無限の存在の別離がない光を得ることができる。それ自身が去っても、それらはその背後にそのまま残り、それ自身が残ったかのように喜ぶのである。

要するに、死は別れではなく再会のチャンスである。変化の段階であり、永遠の果実に穂(実り)を耐えることなのである。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第5段階

ある時再び私の人生は厳しい条件に取り囲まれた。私の注意は私の生涯と私の生命に向けられたと気付いたのだが、私の一生は走り去っていき、あの世に近づいていた。私の生命も又困難な状況に陥り、消え去ろうとしていた。そもそもハイユ(生きたお方)の御名に関する便りの中で説明されていた生命の重要な役目とよい行為と重要な価値はこのように素早く消え去ることではなく、恐らく長くいきるのに相応しいのではないかと、苦痛を感じながら、再び私の師である「ハスブナ=ッ=ラーフ ワ ニ 'アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」の節の頼み救いを求めた。

私は見て知ったのだが、私の人生に関して、私から見るのが1ならば、私の創造者によって見る時は100である。そして私による結果が1ならば、私の創造者のそれは100である。そのような状態で、神のご承諾の範囲で、一瞬を生きることは私には十分であり、長い時は望まない。この真実は四つの事象によって証明される。不死のもの、生きることを望むものは人生の真実と真の決まりを四つの事象の中で探し求め、見出し、考えなされるように。その要点は次の通りである。永遠に生き、自足なさるお方からみると、信仰が人生そのものであり、又、精神的に人生に近づけば近づくほど永遠に近づき永遠の果実も与えられる。非常に高くまで向上することができるので、永遠を顕現することができる。生涯の短さ長さには注意を払わない。

「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」という光輝く節についての第6段階

全ての人々がお互いに離れ離れになる日(審判の日)のような状態であった世界大戦によって知らされた末世の出来事の中で、個々人の別れ(死)に関して思い起こさせる老いと、来世の生活での善への愛と愛らしさへの熱望と完璧さに魅せられる感受性が開かれた。その時、常に破壊的な衰退と消滅、継続との別れである死と無は、恐ろしい勢いでこの美しい世界とこのすばらしい被造物を台無しにし、ばらばらにし、美しさを壊してしまうことを、悲しみを伴いながら、意識し、私は知った。私の生来持っている精神上の愛はこの状態に対し、奮起し反発した。その時、癒しの源を見出すために再び「ハスブナ=ッ=ラー

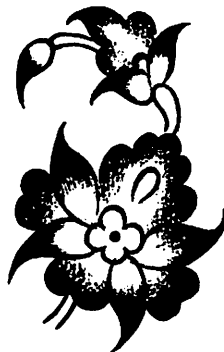
フワニ「アマ=ル=ワキール『私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。』」の節に頼み助けを求めた。「私を読み、そして注意深くその意味を考えよ。」と節は言った。

私も御光章の「アッラーは、天地の光である。(24/35.)」の節という天文台に入り、信仰という望遠鏡で「私たちにはアッラーがいませば十分である。彼は最も優れた管理者であられる。」の節の一番遠い層を眺めた。そして信仰の意識という顕微鏡で、最も細かい部分を調べて、そして私は理解したのである。

鏡、ビン、透明なもの、さらに、泡のようなものも、太陽の光の秘められた様々な美しさとその光の七色をいろいろな角度からその美しさ示している。さまざまな可能性や屈折によって、太陽と光と七色の秘められた美しさをより美しく顕わしている。

それと同様に始めなき終わりなき永遠の太陽^{*}である、いと高き偉大な聖なる美しさと限りなく美しい神の御名の永遠なる美しさを顕わす鏡として、その権限を顕わすためにより加工物、愛らしい創造物、数々の美しい存在が、絶えることなく、来ては去っていった。

自分自身の中に現れる善^よさと美しさは自分自身のもではなく、それは、顕現を望む一種の印であり、聖なる美しさと永遠に癒され見られることを望む純粋に輝く善の指標、印、輝き、顕れであることを、力強い証明の中で説明し明らかにした。そこでは、短く、わかりやすい方法で、それらの証明のうち3つを記すことで、説明を始めている。すばらしい五感を持ち、この便りを見て、そして美しさを求め知ろうとする感性を持つすべての人は、驚かれるの一方、ご自分がそれから益を得るだけでなく、ほかの人々にも益が与えられるよう努めるべきであることを知るであろう。特に、第二の明証（ブルハーン）で五点が説明されている。脳が働き、心も穢^{けが}れていない方なら誰でも、正しい評価と称讃と承認によって「マーシャッター（アッラーがそなたを悪の視線から保護される） タバーラッカー（アッラーが恵美をあたえますように）」と言うであろう。貧しく取るに足らないと見られる肉体を向上させる、目に見張るような奇跡であることをよく理解し確認するであろう。



*常に存在し無限の光を持ち全てを輝かせるアッラーをととえるために使われる表現



どれくらい水を飲むべきか

The Fountain / カディル デミルジャン

古代の思想家は、被造物は4つの基本的な要素から成り立つと考えていました。水、土、火、そして空気です。今日、私たちはこれ以外の構成要素を知っています。しかし今でも、私たちの存在はこの4つの基本的要素を中心としているのです。

私たちの生命に不可欠な水は、世界の70パーセント、人体の65-70パーセント、人間の脳の85パーセント、骨の20パーセント、乾いた種ですらその20パーセントを占めています。体重が65キロのひとなら、ほぼ40キロは水分です。

水の分子構造はユニークなもので、それは他の液体とは異なります。その構造を見ると、私たちは水が可燃性であるか、火の燃焼を助けるものであると結論づけざるを得なくなります。水の分子には可燃性の気体(H+)と、燃焼を助ける気体(O-)が共に見られるのです。

水というゆりかごの中で、「火の子供たち」は明らかに燃える方法を「忘れて」いるのです。そしてそれらは「火よ、冷たくなれ。イブラーヒームの上に平安あれ。」(預言者章第69節)の源となったのです。

科学者たちは、特定の高さから落下するあらゆる物体は、地面に近づくにつれてその速度を速めると説明します。しかし、雨粒は例外なのです。雨の水がもしこの原則に従うなら、それは接触する全てを突き通していただいでしょう。しかし雨のしずくは、まるでパラシュートを持っているかのように、一定の速さで落ちてくるのです。雨のしずくは十分な注意を払って蝶の羽に触れ、それに傷をつけることなく、すみれの花びらに降り立つのです。別の言葉を用いるなら、雨は、神からの恵みとなるのです。

ここで、水の人体への効用と、私たちが飲むべき水の量を考えながら、もう少し水の研究を試みましょう。

人体における水の機能：人体における水の役割の全てを数え上げることは不可能です。以下は、その最たる役割の中の、ほんの一部分です。

水は体温を調節し、汗や排尿を通し有害物質の排出を助け、血液として必要な物質を運搬し、血液の酸塩基バランスを調整し、細胞がそれを溶かすことによって食物を吸収することを可能とし(水は最高の溶媒なのです)、物質交換を維持するため、細胞中の濃度を管理します。

どれくらいの水を飲むべきか：人は平均して、汗、呼吸、排尿、排便を通して1日2.5リットル、コップ10杯分の水を失います。呼吸する時にさえ、私たちは水分を失うのです。特に幼児や年配者の場合、失われた分の水の補給はとても重要です。

私たちは全ての必要性を水だけで満たすわけではありません。他の食べ物や飲み物でも、私たちの必要性を満たす必要があります。しかし水は、人の渇きを癒すのに最高の物質です。他の飲み物はそれに代わることができません。腎臓や肺が問題なく機能するためには、人は少なくとも1日に8杯の水を飲む必要があります。カフェインやアルコールを含む飲み物は、排尿によって水の損失を増すものであり、のどが渇いている時にそれらを飲んではいけません。

例外はないのでしょうか？もちろん例外もあります。例えばあなたに腎結石があるなら、1日10杯以上の水を飲むことが勧められます。温度が高かったり、湿度が高かったり、逆に寒かったりすると水への必要性も増加します。ちょうど、運動する時に多くのエネルギーを必要とするよう

に、より多くの水がそのような状況下では水が費やされる量が増えるのです。

どのような種類の水を飲むべきか：エルズルムのイブラヒム・ハックによると、川の水は井戸水よりも健康的です。特に、川がきれいで汚染されていない環境の中、上流の源泉から下流に向かって流れるものであれば、それは水として最高のタイプです。しかし、広範囲にわたる汚染のため、きれいな川を見つけることはますます困難になってきています。掘りぬき井戸は、そこで水がとどまっているため高い pH を持ちます。地下水の大部分も、高い pH を持ちます。洞窟の中の水もより高い pH を持ちます。一方で、泉の水は軽く、飲みやすいものです。

いつ、水を飲むべきか：食後 2 時間、もしくは 3 時間して水を飲むことは、健康のため勧められる行為です。一部の学者は、食事中に水を飲むことは病気を促すとしています。しかしもし、あなたに胸やけがあるのなら、食事中や食後に水を飲むべきでしょう。それはあなたの食欲を増すからです。空腹であったり、汗まみれであったりする時、もしくは入浴後、あるいは下剤を飲んだ後、果物を食べた後などに水、特に冷水を飲むことは勧められません。それによってあなたはより、渇きを感じるでしょう。我慢していればのどの渇きは勝手に消えていきます。静かに座っている時に水を飲むことは勧められます。

水分量の管理：視床下部は、人体の水分量を管理します。骨端で分泌される ADH ホルモン（抗利尿ホルモン・バソプレッシン）も、人体の水分量を維持しています。水圧や量のわずかな変化は、静脈にある感圧性の浸透圧受容体や圧受容体によって検知されます。これらの受容体は、水圧や水分量の変化を見つけ、脳に、アンバランスとなっていることを知らせます。ADH ホルモンは腎臓に働きかけ、水分の排出量を減らすのです。

大量に水を飲むとどうなるか：一般的に、私たちが大量の水を飲んだとしても、それは問題とはなりません。過度の渇きや過度の排尿は、糖尿病や腎性尿崩症の兆候である可能性があります。

一般的な糖尿病はインシュリンホルモンに関係があります。一方、腎性尿崩症は ADH ホルモンの欠乏から起こります。これらは私たちの体で不均衡を引き起こすのです。従って私たちが過度なのどの渇きや排尿を経験した場合、医者に相談することも適切な処断となるでしょう。

運動している間のどが渇ききっていることは良いサインではありません。なぜなら、専門家は、私たちが運動や激しい動きを行なう前に、必要とする水を供給しておく必要があるとしているからです。通常、最初のうちは体はそれほどの水分を必要とはしません。しかし運動している間は、20分ごとに水を飲むべきです。

水に関するクルアーンの章句：クルアーンは、人類、そして人々の生命のために重要である全てのことについて言及しています。そして水についても、いくつかの章で触れているのです。そのうちのいくつかをここで紹介してみたいと思います。

「かれは、あなたがたの上に豊かに雨を降らせられ」（ヌーフ章第 11 節）

「われは雲から豊かに雨を降らせ」（消息章第 14 節）

「あなたがたは見ないか。アッラーは雲を駆り、やがてそれを相い合わせ、さらに固まりにされ、やがて慈雨が、その間から降るのを。また雹を含む、山（のような雲）を天から下し、かれは、御好みの者をそれで撃ち、御好みの者を避けられる。稲妻の閃きは、本当に目を奪おうとする。」（御光章第 43 節）

「またあなたがたの飲む水に就いて考えたか。あなたがたが雲から（雨を）降らせるのか、それともわれが降らせるのか。われがもし欲するならば、それを塩辛くすることが出来る。あなたがたはどうして感謝しないのか。」（出来事章第 68-70 節）



『アッカトーネ』 Accattone

以前、友達からメブラーナ(ルーミー)の面白い言葉のコピーをもらったことがあります。元は絵葉書だったのですが、そこには彼の「7つの教え」として

1. 恵みと助けは流れのように与えよ。
2. 情けと哀れみは太陽のように与えよ。
3. 他人の欠点は夜のように隠せ。
4. 怒りと苛立ちは死のようにあれ。
5. 謙遜と謙虚さは土のようにあれ。
6. 寛容は海のようにあれ。
7. あるがままに見せるか、見かけのごとく振舞え。

…というものが書いてありました。

どの言葉もなるほど、と思うものですし、深く味わえるものなのですが、私に一番ヒットしたのは7番目の言葉でした。

「あるがままに見せるか、見かけのごとく振舞え」

そう言うのはとても簡単ですが、実践するのはとても難しそうです。ですが、自分を見かけとは違うものに見せようと振舞ったり、自分自身を偽ったりすることで、時に人は取り返しの付かないところまでいってしまいます。今回ご紹介する映画『アッカトーネ』は、そんなことをしみにみ思ふ映画でした。

愛人のマッダレーナに売春をさせ、彼女の稼ぎで暮らしているヴィットーリオは仲間から「アッカトーネ(乞食)」と呼ばれていた。彼を中心に、日中からぶらぶらして過ごすローマの男たちとそこにまつわる「働く」女性たちの物語。

ある晩、アッカトーネの以前の兄貴分チッチョの手下にマッダレーナが襲われた。警察で容疑者の面通しが行われるが、日頃から彼女を侮辱していた若者を犯人だと偽って告げたため、マッダレーナは刑務所に入れられてしまう。収入源をなくしたアッカトーネの生活は日増しに苦しくなり、食べるのにさえ困るようになった。

別れた妻のもとへ行っても取り合ってもらえず困窮していたある日、アッカトーネは純情な娘ステラと出会う。アッカトーネは彼女を一人前の女に仕立て上げ、マッダレーナの時と同じ生活をしようとする。しかし、ステラに本気で恋をしたアッカトーネは彼女のことを思い、心を入れ替え自ら真面目にお金を稼ごうとする。

だが、それも長くは続かず、結局仲間と盗みを働いてしまうのであった…。

…あらずだけ読むと、本当に救いようのない話、という気がしてきます。何なんでしょう、この男は。

この映画は、イタリアの奇才、ピエル・パオロ・パゾリーニによって作られた処女監督作品で、ローマの下層の人々の刹那的な暮らしが、本当にそこから拾い上げた人々によって演じられているという、リアリティあふれる映画になっています。ですが、公開当時、ローマ・オリンピックも終わって経済成長に沸くイタリアにとっては「見たくないイタリアの現実」を映したともいえ、右寄りの人々や法王庁からは「猥褻」とされ、左寄りの人々や共産党からは「現実ではない／デカダンスだ」と批判されたそうです。パゾリーニ自身はキリスト教の信仰を大切に考えたうえでマルクス主義に影響を受け、下層プロレタリアの人々を擁護し、彼らと交わり、「現実」を見つめていたにもかかわらず、この扱いでした。それは悲しい事実ですが、この映画には何か、一言では片付けられないさまざまな深みがあります。

そのうちのひとつが、冒頭にお話したメブラーナの7番目の教えに関連するものです。

アッカトーネは適当で、楽に暮らせると考えるもののためなら何でもする男です。この男にとって女は食べ物と大差なく、どちらかがより簡単に手の届くほうにあればどっちでも満足、といった感じです。と、いうのも、腹ペコでどうにか仲間を出し抜いてスパゲティにありつけるぞ、という一歩手前で、目をつけていた女に出会ったためすぐにそちらに方向転換したりするのです(情けない…)。しかし、今回、このアッカトーネは私にとってどうでもいい存在です。問題は、その女性なのです。

つまり、ステラ。彼女がとても「ありがち」な女性なわけです。真面目で純粋な女に見え、自身の高いプライドを持ちつつも、「私の生き方(他所から見たら)こうしなくっちゃいけないんじゃないかしら」という自分の中での思い込みに向かって進む女性。そしてアッカトーネや彼の友人たちにあれこれしてもらって「あなたたちはみんな本当にいい人なのね」と心底思っているように振舞うけれど、実は「私はちゃんと分別もあるし、遊ばれるほど馬鹿じゃないわよ」とも思ってしまう女なのです。…映画を見ている人なら皆わかると思いますが、ステラは男の下心の隠れ具合を甘く見すぎています。優しくしてくれたりするのを「ありがたがっている振り」をして、うまくあしらえると思っています(…という、穿ったような見方をしてしまうのは私が女だからでしょうか)。そこが彼女の問題なのです。本当に見た目どおり純真な女性ならば、男あしらいが出来る振りなどせず、マトモな女性として振舞うべきでした。または、本当に男あしらいが出来るような女性ならば、そのような女性として振舞うべきでしょう。彼に好かれたい、一緒に居てみたいが故の行動だとは思いますが、アッカトーネ達に合わせて威勢を張っても意味が無く、結果、どうしようもなく身持ちを崩す一方となってしまいます。むしろ、最初の真面目な印象をキープすることによってこそ、ダメ人間なアッカトーネですら「この子を大事にしてあげよう、ちゃんと仕事しよう」と思うわけですから…

「あるがままに見せるか、見かけのとおり振舞え」

…メブラーナの、とてもシンプルで、とてもわかりやすいけれど、とても実行しづらい大事な一言にまつわるお話でした。

『アッカトーネ』 1961年 イタリア 117分

監督：ピエル・パオロ・パゾリーニ

出演：フランコ・チッティ(アッカトーネ)／フランカ・パスト(ステラ)他



セマー (旋回舞踏)

セマー (旋回舞踏) はメヴラーナの生前においては、決められた形で行なわれていたわけではなかった。セマーをはじめたのはメヴラーナの息子たちであるスルタン・ヴェレッドとウル・アーリフ・チェレビであった。彼らは、ピール・アディル・チェレビの時代まで、セマーを少しずつ展開していった。そしてセマーの形は教えられたり、学ばれたりするようにもなった。最終的にセマーの形式は十五世紀に完成された。預言者を称える賞賛の言葉 (ナート) は 17 世紀にセマーに取り入れられた。セマーは宇宙の創造、人間の創造、そしてこの世における我々の誕生を象徴している。また、神への愛により支えられているしもべという立場を認識した後の、人間の進歩を象徴している。さらに、「完成された人間」の階級への、我々の向上をも象徴している。

セマーは、メヴラーナによって書かれた預言者ムハンマドへの賞賛の言葉によって始まる。これは、イトリという名でも知られる作曲家バフリザーデ・ムスタファ・エフェンディによって作られた音階がつけられている。これは声のみによって歌われ、楽器は一切使われない。

これに続いてドラムが叩かれる。これは神の命令である『クン (在れ)』を象徴している。

さらにそれに続き、ネイ (葦笛) の即興演奏が行なわれる。これは、あらゆるものに生命を与えられ、完成させられる神の息遣いを意味している。

セマーの間は、タンブール、ワード、カマンチェ、ベンディルといった伝統的な楽器が用いられる。

ペシュレヴ (前奏曲) と共に行なわれる『スルタン・ヴェレッドの歩行』と言われる儀式は、中心部の周囲を3周する、周回の動きである。この間に行なわれるセマーゼン (セマーを行なう人) たち同士のあいさつは、肉体や形に隠された魂と魂のあいさつを象徴する。

入り口の地点と赤い敷物の間には、仮想のラインが引かれており、セマーの舞台を二つに分けている。この神聖なラインはハット・アル・イスティワと呼ばれ、決して踏まれることはない。

周回が行なわれる間、セマーゼンたちはお互いに三度あいさつをする。この目に見えるあいさつは、魂のあいさつを象徴するものである。セマーゼンたちは舞台右側から現れ、赤い敷物の方へと向かう。その時、このラインを踏んだり、赤い敷物へ背を向けたりすることはない。反対側まで進むと、後ろにいるセマーゼンと向き合う。二人のセマーゼンは向かい合い、同時に頭を下げ、あいさつをする。これがムカバラと呼ばれる。

三回目の動きの最後で、シャイフが赤い敷物に座った後、真実 (神) に到達したことを象徴する『スルタン・ヴェレッドの歩行』が終わる。

短いネイの即興の後、セマーゼンたちは、立ち、体を互いに傾けあった状態で、彼らのシッケ帽 (オスマン帝国時代の墓石に似た形の、長い、羊毛のできた帽子) をまっすぐに正し、黒いコートを脱ぐ。彼らはこの世界から離れ、彼らの純白のガウンに象徴されるように、霊的な、真実に目覚めた状態となる。彼ら

は左の肩を右手で抱き、右の肩を左手で抱き、『一』を象徴する。そしてそれは神の唯一性を反映し、証明するのだ。

シャイフの手に口付けをし、続行する許可を得て、セマーゼンはセマー（旋回舞踏）を始める。

セマーには四つのあいさつが含まれる。

「しもべであることを意識すること」

「主の偉大さと力を前に、畏怖していること」

「この畏怖が愛情に変わること」

「しもべである人間として、最も高い位階に戻ることに」

これらはそれぞれ、一回目、二回目、三回目、四回目のあいさつに象徴される。

クルアーンの読誦が始まると、セマーゼンたちはセマーを終え、自分の場所で座る。セマーの儀式は、赤い敷物に向かってシャイフやセマーゼンたち、そして演奏者があいさつを行なうことによって終了する。

メヴラーナの、セマーへの見解

次の詩は、彼がセマーをどのように認識していたかを示すものである。

セマーとは何か、知っているか

それはベリー（その通りです）という声を聞くこと。自らを忘れアッラーの御前に至ること。

セマーとは何か、知っているか。

それはあなたの親友を見て、知ること。そして神聖な覆いをとおしてアッラーの神秘を聞くこと。

セマーとは何か、知っているか。

それは被造物から何も感じず、絶対的な憐れの中、永遠の喜びを味わうこと。

セマーとは何か、知っているか。

それは我執と戦うこと、半分首を切られた鶏のように血まみれになって地でのたうつこと。

セマーとは何か、知っているか。

それは預言者ヤークブさまの癒しと、ユースフさまとの出会いの香りをその衣装に感じ、味わうこと。

セマーとは何か、知っているか。

それは預言者ムーサーさまの杖のように、ファラオのあらゆる魔術を静めること。

セマーとは何か、知っているか。

それはシャムス・タブリーズィーのように心を開くこと、そして聖なる光を見ること。

セマーと熟考

セマーとは、行為における熟考である。熟考は心の内部で静かに行なわれる。ハディースは神の本質については熟考しないよう警告し、それは神の明示やみわざに集中させられるべきだと諭している。神の明示やみわざについて考える時、瞑想は熟考によって妨げられる。あらゆる妨げを避けるため、瞑想を助けるために音が使われる。当初は自然の音のみが用いられていたが、次第に、霊的な特性を持つ様々な楽器の音も用いられるようになった。これが、セマーに音楽が導入された経過である。

初期においてはしばしば、ネイ、レバブ、デフやズルナが使用されていたが、後にはネイとレバブのみが使用されるようになった。

音楽は次の韻詩のように、メヴラーナによって定義されている。

「音楽は主のしもべのための養分のようなもの。

なぜなら音楽の中には、神の御前に至るという希望がある。」

従って瞑想と熟考に結合された音楽は、神の御前に至るより速い方法であると思われる。一方、音楽は肉体的動きも引き起こし、それは肉体的感情と願望を伝えるの。当初、これらの身体的動きは座っている間の体の律動に限られていた。しかし次第に、音楽的な調和にあわせた体の動きが加えられるようになり、やがてそれはセマー（旋回舞踏）へと発展したのである。

このようにして熟考は心と音と、そして動きと結合したものとなった。肉体的、精神的妨げを避けるため、心と体の両方が瞑想状態に入るのである。

セマーは人間の精神の向上を象徴している。しもべの顔を真実（神）に向け、神聖な愛への賛美の中にあつて自らを放棄し神のうちに没頭する。そして最後にはしもべとしての奉仕や、成熟と浄化へと立ち返るのである。

シッケ帽をかぶり、死者を包む白布のようなガウンを着たセマーゼンたちは、そのガウンを脱ぎ、その道を進むことによって真実に目覚める。セマーの間、彼の腕は大きく広げられ、彼の右手は折るように空に向かい、唯一なる神からの榮譽を受け取れる状態にある。左手は下にあり、主から与えられた恵みを人々へ伝え与える。セマーゼンは右から左へと旋回し、心臓の周囲で円を描いているようである。そして地球上の全ての人々、全ての被造物を愛と敬意のうちに抱擁するのだ。

人間は愛するため、愛されるために創造された。メヴラーナによれば、全ての愛は、神の愛への架け橋となるものなのである。

結論：メヴラーナは全能の神にその人生の全てを捧げた。彼は自分自身が神に至ろうとするだけでなく、人々がそれを実践できるよう助けともなった。彼は愛という旅路を行く旅人のようであり、この愛を「それは私において、私に関する何物も残さなかった。」と表現した。彼はその思いや感情を多くの人々に伝え、多くの魂を喚起させた。次の韻詩は、この事実を簡潔にまとめている。

「私は生きている限り、クルアーンへの奉仕者であり、

預言者の道の一掴みの砂である。

誰かが私に関してこれ以外のことを語るなら、

私はその言葉とその人自身を憂うだろう。」



今日に至るまで数世紀もの間、イスラーム世界は過失という魔の手につかまれて身もだえし、自らの精神や真髄に何らかの救いを求めることもできないでいました。その手をふりほどき二歩前進することに成功しても、すぐに何歩か後戻りし、脇道にそれて己を見失ってきました。そのような気まぐれな放浪もしくは故意の逸脱（そこでは害が益を上回り、害が益を一掃してしまうのですが）は、社会が自己に内在する自らの能力を見出さんとする努力を妨げ、成し遂げられた努力やそれに取り組もうとする人々に深刻な支障をきたすのです。我々は、この広い世界にあるあらゆるものが修復不可能なまでに悪化し、国家や民族の車輪が本来の姿と反対方向に転がっていくのを目撃してきました。

それゆえ我々はイスラーム世界について探り、その信仰についての理解、イスラームの受容と解釈、神についての意識、熱意と切望、理性、理論、思考の様式と体系、自己表現と意思疎通の流儀、そしてこうした特質や技量を人類が獲得するのに役立つ慣例、について見ていく必要があると信じています。これによって、世界をあらゆる側面や要素において徹底的に再生する方向に導いていけるかもしれないからです。

我々の精神生活の基本は宗教的思考と想像力です。我々はこの二つとともに人生を維持してきたばかりではなく、これらに依拠して行動してきました。その二つを取り上げられたら、我々は千年前の状態に引き戻されてしまうでしょう。宗教は儀礼と信仰の組み合わせであるだけでなく、その最終目標は、人類と宇宙に意味を与えたり、人間性の本質と精神への扉を開き、この世を超越した願いを実現し、そして人間の良心に内在する永遠性の感覚に呼応することも含まれるのです。宗教は個人的な生と全体としての生のすべてを包含します。それは理性、心そして魂といった我々が持つすべてのものに介在します。また我々の意図に応じて行いのすべてに色を施し、すべてのものを色で染めるのです。

信者がなすどの行為もその軸は信仰であり、あらゆる奮闘は人の現世的な欲求との戦い（大きなジハード）という側面を持っています。そして努力は常に、来世と、神のご満悦を得られることに向けられています。信者の生活では現世と来世が切り離されていることはありません。知性と心の間でなら障害物はありません。信者の感情は必ず理性と一体となっています。そして判断力によって靈感が無視されることもありません。よって信者の精神世界では、経験は知性に向かって伸びた光からなる梯子^{はしこ}であり、知識は理解と知恵と直感によって強化された^{とりで}砦^{とりで}なのです。信者は愛という巨大な翼^{はしこ}によって無限性へと舞い上がり続けるワシに喩えられるでしょう。もしくはその砦^{とりで}の上で、知性という刻印と木槌を用いて全存在を浮き彫りにする浮き彫り細工師ともいえます。そのような知力があるところではいかなる割れ目も存在せず、個人であれ全体であれ人間性をないがしろにすることはありえません。

宗教が科学や理性に矛盾すると捉えるのは悩める人々です。そういった人々は、宗教と理性の双方の精神に気付いていないのです。それだけではなく、社会の異なる部分同士で起こる衝突の責任を宗教に帰す

ることは全くの欺瞞だといわざるを得ません。人間同士もしくはグループ間で揉め事が起こるのは、無知や、個人的な便宜・利益への野心、特定の集団、政党、階級が持つ利害関係が原因となるのです。宗教はそういった性質のものや野心に賛成も容認もしていません。現実問題として信仰心を持つ人々の間でも揉め事や衝突が発生してはいますが、同じ精神を信奉しながらも、信仰の程度が異なったり、誠意を保つことができないためにそれは起こるのです。そのため、時に自らの感情を乗り越えることができず、打ち負かされてしまうのです。本来は、信仰に備わった美德はそういった災難を容認することももたらすこともできません。実にそうした不幸に陥るのを避ける唯一の方法は、宗教があらゆる制度とともに我々の日常生活に確立され、社会全体の生き血となるようにすることです。

イスラーム共同体には復興が必要です。心的、精神的、そして知的機能において大々的な革新が必要です。さらに積極的な表現を使うならば、時代と場所を越えてあらゆる階層の人々の必要を満たすため、そしてあらゆる生命を包含するために、天命の柔軟性によって許される限りの拡張性と普遍性とを適用しながら、宗教の元来の原則を維持しようとする真摯な努力を結集することによって、この共同体は蘇生されなければなりません。

イスラームの出現以来（神がその保護を我々から奪われないことを願いますが）、この祝福されたシステムは繰り返し、再生への扉を開け、多くの復興に遭遇してきました。諸学派は概して、確実に大部分が、法学と法の分野において新たな進展を見せています。イスラーム神秘主義の諸教団も心と魂に至る道を捜し求め、それらを大道に作り上げてきました。学校や大学がきちんと機能していた頃は、宇宙や、そこに存在するものの意味を理解することに専念していました。現代に求められる再生や刷新とは、こういった事柄すべての連携に違いありません。それはそのすべてを一堂に集めることによって、また内核のために外側の鋳型を脱ぎ捨て、魂のために外観をかなぐり捨てることによるのみ可能となるでしょう。つまり信仰における確信、行為における誠実さ、そして思考と感情において神を意識すること、に向かうことによるのみ可能となるのです。

崇拜行為の量は完璧であるべきで、その質が目標とされるべきでしょう。言葉は礼拝の手段であり、魂や誠実さが肝心です。スンナが導き手としてあるべきであり、意識は不可欠です。これらすべてにおいて、その最終目的は神であるべきなのです。定められた日々の礼拝は、立ち上がったたり腰を曲げたりする一連の運動ではありません。ザカート（定め喜捨）をするのは、よく分からない目的のために見知らぬ土地に住む見知らぬ人々の不幸を軽減してあげるために収入や財産の一部を税として手放すことではありません。断食はダイエットのためでもなければ単に飲食を控えるというだけではありません。そして巡礼は、異国の地で自らの貯蓄を外貨として費やすために町から町へと移動することではありません。これらの行いすべてがそれぞれの軸や進路や精神の範囲内で実行されないとしたら、類似の世俗的な活動とどのように違っているといえるのでしょうか。崇拜行為の量に専念するなら兎戯に過ぎないのです。嘆願の中に精神を込めないで泣きわめくのは声帯の訓練のみを欲している人に相応しいのです。その真髄を理解せずに巡礼に出かけるの

は、巡礼者の称号や旅のエピソードを手に入れて慰みを感じているに他ならないのです。そのような方法でなされる崇拜行為にどうやって意味が見出せるというのでしょうか。

そういった負の畏にはまって憔悴^{しろうせい}するのを避ける方法は、我々に内在する空虚を埋め、弱点を取り除き、肉体やこの世的な欲望の奴隷となることから救い出し、心と魂による人生のレベルへと方向づけてくれる「魂と本質を知る医師」を育て上げるべく力を総動員して努力することです。我々は、あらゆる分野における知識全般に心が開かれた、魂と本質を知る医師を必要としています。洞察力、文化、精神的知識、靈感、神の祝福、潤沢と繁栄、啓発。物理学から形而上学^{けいじょうがく}、数学から倫理学、科学から精神性、天文学から主観主義、美術からイスラーム神秘主義、法から法学、政治から宗教的なイスラーム神秘主義教団による特別な訓練（イスラーム神秘主義の文脈における旅とイニシエーション）まで。あれこれと特別な資質や能力が必要なものではありません。むしろ完成された包括的な知性が必要なのです。脳が至近から最も遠い部分まで、極小から極大まで、神経線維によって体のあらゆる部分や細胞とつながり相互作用を持っているように、この知性の一団も国家組織の原子や分子、微粒子とつながり、交信しあい、相互に作用するでしょう。また、そうした知性は社会を構成するあらゆる機関や部署に所属することになるでしょう。またその手は重要な諸機関の中に入り、大きな力を持つようになるでしょう。そして過去からもたらされ現在にその深みを増し未来に向かって拡大していく、魂から本質までのある種の事柄について、あらゆる階層に属する人々に向かってやさしく伝えていくことでしょう。

そのような魂の医師団は、思慮深く行儀の良い学生から町で無為に過ごす者たちまで、あらゆる人々を抱擁してくれるでしょう。そして彼らの魂が発するメッセージをすべての人々に伝えることによって、また人々を知識や技術、そして未来への資質を持った者たちのレベルに高めることによって、彼らは社会の公共の利益と共通の利益を人々に差し出ししてくれるのです。学生が住む家々や寮、学校、高等教育機関、そして安息や信仰、精神的啓蒙を得る場所などあらゆる場所で、彼らは社会のあらゆる階層の人々を時代の穢れから清め、人間性の完成へと道を開いてくれるのです。

さらに付け加えるとこの一団は、新聞や雑誌、ラジオやテレビといったメディアの強力な武器の威力をそぎ、国民生活や信仰生活の声と呼吸へと変換してくれるでしょう。そしてこうしたメディアを通じて、暗闇の心、腹黒い考えを持つ人々に、人間たることを知らしめてくれるでしょう。

また、国内で起きている逸脱と海外からの圧力によって本来の姿と方向性を変え、他者からの命令と支配という風に吹かれてふらついている我々の教育・訓練機関も、その一団によって救われるでしょう。そして歴史的観点に応じて立て直しと再編を図り、現代の要求に扉を開いて即応する場に転換されるでしょう。また様々なスタイルや方法論、高度な計画を用いて、素晴らしい特質を備えた非常に役立つ場所へと持ち直すでしょう。

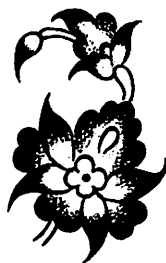
最後にまとめると、以上に述べたようにして我々は立ち上がるでしょう。硬直した空虚な形式主義の惨状から真の科学的理解へと。また「芸術」と肩書き付けられているものの実際はもったいぶった下品で恥ずべき種々の作品から本物の芸術、美学へと。出所不明の習慣や嗜癖、執着から歴史と宗教に基づいた倫理

性の自覚へと。そして我々の心に巣食う煩惱の罫から、奉仕と従順と意識の一体化、そして神への服従と信頼へと。

世界は改革ラッシュの様相を呈しています。しかしながら、すでにボロボロになった資本主義や共産主義の幻想、合成物である社会民主主義、時代遅れの自由主義から新しいものは何も出現しないのではないかと思います。ことの真相は、もしそこに新しい世界秩序に向けた世界があるとしたら、それは我々の世界だということです。来るべき世代は時代を振り返って、それを我々の「ルネサンス（復興）」だったとみなすことになるでしょう。

復興によって我々の感情、思考の広がり、そして芸術や美学の理解は深みを増し、今までにない多様性がもたらされることでしょう。このようにして我々は独自の感性に合った楽しみを見出し、独自の音楽に到達し、我々に相応しいロマン主義を発見するでしょう。科学から芸術、思考から倫理に至るまであらゆる分野において堅固な基盤の上に我々の中から輩出される人材を定着させることによって、彼らの未来を確かなものにすることができるのです。

この事柄に関して、我々の旗印は努力とダイナミズムです。そして信仰と真実への目覚めが力の源となります。我々をドアからドアへとさまよい歩かせ、不信仰と背徳に治療薬や解決を求めてきた人々は常に間違いを犯していたのです。我々が日夜、高深さを獲得し保ち続けることができたのも、全身全霊で神にしがみつき服従する限りにおいて実現できたのです。またそれは、世界にある何ものでもなく、我々の国家、国民、そして我々をその懷で繁栄させてくれた我々の土地を選び取ることによって可能となったのです。別の選択肢については説明するまでもないと思います・・・。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200 円（日本以外は 1部 250 円）

国内： 1ヶ月 250 円、 6ヶ月 1300 円、 1年 2500 円

国外： 1ヶ月 300 円、 6ヶ月 1600 円、 1年 3000 円

（2004 年、2005 年、2006 年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み 2500 円）

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京 UFJ 銀行 店番号: 630 (春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

「やすらぎ」編集部